

助動詞相当表現「わけだ」の成立

— 近世講義資料を中心として —

— 述語の「わけ」

句（主語＋述語）の述語として使われる「わけだ」は形式名詞、或いは助動詞相当であるといわれている。その定義は、述語の「わけだ」に対応する主語が消去され、「わけだ」に上接する用言の一部と考えられるようになったもの、という森重敏（一九六五）の定義が至当だろう。つまり「わけだ」の主語を文脈からも補うことができなくなったものは形式名詞と見なせる。そして、形式名詞「わけ」と指定の「だ」が意味的に一語相当として用いられるようになれば、それは助動詞相当なのである。

この助動詞的な「わけだ」（以降、実質名詞としての「わけ」と區別して「わけだ」と呼ぶ）は連文に渡って働くため、二文間の関係の意味の把握は、或る程度以上は難しい、というより無理であ

る。随って用法の典型の分析以上には進まないわけだが、その「わけだ」の代表的な用法は、松岡弘（一九九三）によると、概ね次のように分類される。^②

A 因果関係

・ B 「大学の中が静かでしょう。どうしてだかわかりますか」
A 「さて、あ、わかりました。つまり、冬休みに入ったわけですね。」

・ 四人で一組だから、七組だけでも二十八人の男子がいるわけである。

これは、従来「原因」（前者の例）と「結果」（後者の例）のよに分けて考えられてきたものを一括して考えたものである。

B 対比関係

・ 例えば姫路の駅のうどんを食へに行くわけです。このうどん

んは中華めんをうどんのダシで食べるもので非常においしいんですが、往復二時間乗っているあいだに結構アイデアが出てくるわけです。といっても目的もなく電車に乗るのではなく、うどんを食べる目的をつくるわけですね。

これは「原因」が消去され、或いは未分化であり、前文との関係が希薄で畳み込むように「わけ」を多用するものである。

C 表裏関係

・ 八紘一宇 といわば由緒正しき言葉で、『広辞苑』には「世界を一つの家とすること」とある。そして「太平洋戦争期、わが国の海外進出を正当化するために用いた標語」という説明もついている。つまりこの場合、本来はユートピア的な言葉を、日本帝国の支配層が自分たちに都合のいいようにねじまげて使ったわけだ。

これは一般的に「言い換え」などといわれており、話題となつている内容を別の視点から言い換えたものである。

以上のような「わけ」の用法が助動詞的な用法の意味の典型だと考えられる。

二 文学作品の中の「わけだ」

前稿で文学作品を中心に「わけだ」を調査したところ、天保期

助動詞相当表現「わけだ」の成立

(一八三〇)～(一八四三)の為永春水の人情本において現代語に通じる「わけだ」の用例が多数確認された。^③しかし近世の前期における「わけ」の使用は普通名詞として「区別」「事情」「理由」などの意義を持つものだった。^④

・ 「何として此わけ【事情】を存じたぞ申せ」(『好色一代男』)

P182

・ 「……と押肌脱ぐを、狼狽て、刀抜き取り、何共心得ぬ事。死ぬるほどの事なれば定めし根深き訊【事情】あるべし。様子によつて望を叶えん」(『新色五巻書』)

P471

・ 詞コレ氣遣ひせまい此勅六。久松殿の肩持ねばならぬわけ

P172

【事情・理由】は、腕に卒塔婆の入疔。……(『新版歌祭文』)

それに対して『春色梅兒誉美』『春色辰巳園』での会話文は実質名詞としての用法の他に助動詞としての「わけだ」の使用が認められる。

・ 此いと「ナニサそれもあのとふりの気性の藤さんだから、見かけて頼んだわけだもの、それをいってゐちやア出来ねへ世話だものを。……」(『春色梅兒誉美』)

P63

・ 米「……おめへなり私なり、斯いふ活業してゐるからにやア、ちツとやそツとのちよい色【小さな色恋沙汰】ぐれへは、あた

助動詞相当表現「わけだ」の成立

三三

りめへなわけだはネ。…(『春色梅兒誉美』) p250

・「そしてまた詮方がないとお言だが、仇吉さんと切れてせへしまひなさりやア、何もいさくさはねへわけだアネ(『春色辰巳園』) p365

しかしあまりに通俗的な——言い換えればウチの間だけで通用する資料だけを以てその表現が一般的に通用していたとみることは慎まなければならぬ。確かに天保期の江戸では「わけだ(ぢゃ/さ/なり)」という表現が一部の人々の間で通用していたことは事実だろう。しかしその時代の一般的な表現かどうかは様々な資料から総合的に判断しなければならない。文学作品に現れる用例は、職業や地域、身分などに制約された、偏った使用に限られるのかもしれない。これらよりもっと一般的な、中立的な文体の資料でも「わけだ」の用例を採集すべきだと思ふ。このような観点から近世の講義資料を中心とした調査を行った。

近世の講義資料には和歌・漢学・国学・仏教などで専門的なものがある一方、初学者や教育を受けられない社会階層のような、必ずしも専門的な知識を持っていない人々をも対象とした啓蒙的なものもある。これらの講義資料は不特定多数の人々に語りかけるという性質上、口語でありながら偏りの少ないものになっていることが推定される。例えば心学道話は聴衆の階層も多岐に渡っておりその代

表的なものであろう。そして講義という性質上、論理的な因果関係を述べる表現が多用されることが予想され、「わけだ」の用例も多く見いだせるだろう。本稿ではこのような講義資料のうち口語的なものを選んで調査した。また、現代語への連続を考えるために、近世以降の明治の資料をも併せ見るべきであるが、膨大な量に上るので、別の機会に改めて論じたい。

三 「わけだ」の用例

本稿で調査した資料は次の通りである。講義・刊行の年代が比較的明らかなもののみ()内に注記した。^⑦

佐藤直方(一六五〇～一七一九)「学談雑録」(一七一六頃 講)

浅見綱斎(一六五二～一七二一)「綱斎先生敬齋感講義」(一六九五頃 講)

若林強齋(一六七九～一七三三)「雑話筆記」上巻のみ(一七六一頃 筆)

手島堵庵(一七一七～一七八六)「坐談隨筆」(一七七二刊)、「朝倉新話」(一七七二刊)、「知心弁疑」(一七七三刊)、「前訓」(一七七三刊)、「会友大旨」(一七七三刊)

中沢道二(一七二五)一八〇三)、「道二翁道話」(一七七五

刊)

布施松翁(一七二五)一七八四)、「松翁道話」(一八二三刊)

細井平洲(一七二八)一八〇二)、「平洲先生諸民江教諭書取」

(一七八三講)

海保青陵(一七五五)一八一七)、「稽古談」(一八一三筆)

平田篤胤(一七七六)一八四三)、「俗神道大意」(一八一

講)、「古道大意」(一八一三講)

柴田鳩翁(一七八三)一八三九)、「鳩翁道話」(一八三三講)

「続鳩翁道話」、「続続鳩翁道話」、「鳩翁道話拾遺」

以上の資料のうち、山崎闇齋門下の佐藤直方、浅見綱斎、若林強齋の講義は専門的な漢学の講義だが、文体は平易である。以下年代順(著者出生年順)に用例を見ていく。

佐藤直方(一六五〇)一七一九)、「学談雑録」(一七二六頃講)

崎門三傑の一人である。文末は基本的に「ナリ」であるが、稀に

「ジャ」「ゾ」も用いられる。

(1) 況ヤ我邦ニテハ往古ヨリ、其任ニアタル学者ハ勿論、其ワ

ケ「事情・内容」ヲ知タル学者モ聞及ス。^{P428}上

(2) 阿弥陀ガ我ヲ十万億土ヘ迎トラフト誓願ヲ立テタトテ、難

有イ辱イ御仏様ジャト云ハ、ドウシタワケモナキ【訳の分

からない】コトゾ。^{P437}下

(3) 学問ヲ進ガアレバ、若キ時ノワケモナキ【めちやくちやな】

コトハ、身フルイシテイヤナ筈ナリ。^{P444}下

(4) 星隕為レ石ハ、訳【事情・理由】ハ八点セネドモアレヲ不審

ハセヌ。^{P450}下

(5) 雀大水ニ入テ蛤トナル、蜥蜴ノ電ヲフラス、訳【事情・理

由】ヲ知ラヌハ、其理ガスマヌト云モノナリ。^{P450}下

(6) 悪人ガ上ニ立バ、天下万物ワケモナフナル【めちやくちやにな

る】ヲ見ヨ。^{P451}下

(7) 曰、ナル程、真実ノ行アレバ其誠二人ノ感ズルハツナリ。ソ

コニワケ【事情・理由】ノアルコト、王学ノタラヌハソコニ

アリ。^{P456}上

(8) イカニ真実ニ踏込デシテモ、ワケモナイ【道理のない】火事

ノタメニヨカラヌコトヲシテハ、人ノ感ハナキ筈ナリ。^{P456}上

(9) 其筋ヲ知タ人ハ大方訳ノ聞ユル【道理が分かる】様ニ云ホド

クナリ。^{P461}上

用言を受ける用例が(5)にある他は、指示詞(「この」「その」「どういふ」等)を受けるか、単独で「わけがある」「わけがない」などとして使われる例が多い。述語として用いられている用例はない。

浅見綱斎(一六五二)一七一一)、「綱斎先生敬齋箴講義」(一六九

五年頃)

崎門三傑の一人である。文体は前代の抄物に似ている。文末には「ジャ」「ソ」が多用されているが、「ナリ」も随所に散見できる。「わけだ」の例は見あたらない。名詞として「わけ」が使われているものを挙げる。

(10) 天地ノ生ジテ、人ト立テ居ルナリハ、先身ニ有テ、口、鼻、耳、見タリ、聴タリ、見ルカラ八色ガアリ、聞カラ八声ガアリ、口デ言カラ八言答ノ^{ワケガ}「事情・理由」アリ。P120

(11) 況ヤ程子ノ主ニ無適ハ、一意ニ説テ、事ノ心ノトワケ〔區別〕ガナイニ因テ、一ツガ即無適ジヤガ、…P147

これらは「わけ」が主語に位置しているが、述語的に使われる次のような例もある。その場合「わけ」に上接するのは、「この」「こふした」「右段々の」のような類であつて、はっきり句と認められるものではない。

(12) 斯^ヲシタ^ヲ「事情」ジヤニ因テ、…P123

(13) …此^ヲ「事情・理由」デ恐ルト謂コトハナイ。P134

(14) 右段々ノ^{P186}「事情」ニ因テ、兎角敬二理ヲモテキテ謂ハ悪シ。

若林強齋(一六七九—一七三三)、「雑話筆記」(一七六一頃山口春

水筆録)

強齋は浅見綱齋の弟子である。山口春水が師強齋の言説を書き留めておき、師の没後編纂したものである。筆者の言語の混入も考えられる。文末は「ナリ」「候」が基本で、本稿調査資料の中ではやや固い文体である。

(15) ソノ^ノ「事情・理由」ヲキケバ、…トキコヘ候。P493

(16) …ナルホド一通リ八聞ヘマシタガソレデハイケヌトアルニツイテ、其^ノ「事情・理由」ヲ尋ラレタレバ、岳飛ノ云ハル、ハ、…P499

(17) イカナル^ノ「事情」候ヤ氣ツカハシク存候コヘ、トカク善助ヲツカハシ、様子^ノ可^レ承^ト存候。P506

(18) アソコガワケ「事情・理由」ノアルコトニテ候。P521

綱齋にも見られたが、「ワケガアル」「ワケ候」という用例が目ざれる。これは時代が下るとともに増えてくる用例である。これらの用言を受けない用例の他に次のように用言を受けるものもある。

(19) 俗ニ云ニモソノ宗領^ノデナケレバ若殿若旦那トモ云又ハ、コ、二別段ナワケ「事情」アルコトニテ候。P472

(20) 「仏教の作法について」…金箔^ノデダビ「色どりする」ヤウワケナシ「理由がない」、何カラ見テモ角^ノカラ見テモ一ツモ理ニ合タ

コト無^レ之候。P473

(21) …聊^ノ力^ノ左様ノ^ノ変^ノ可^レ有^様子ハ不^ニ相^ノ聞。ナニトゾカワリ

モアレバ拙者モ聴クワケ【道理】ノコトニテ候。 P505

前二者は主語としての用例だが、最後の用例は修飾語となっている。これは「わけだ」に連なる過渡的な用例ではないだろうか。

手島堵庵(一七七一―一七八六)「坐談隨筆」(一七七一刊)、「朝倉新話」(一七七二刊)、「知心弁疑」(一七七三刊)、「前訓」(一七七三刊)、「会友大旨」(一七七三刊)

心学についての講義録である。堵庵の著作は二―三つの著作の分量が少ないので著作数を多くしたが、全てを合わせても他の著者よりとりわけ分量が多いわけではない。まだ「わけだ」は見られない。

(22) むかしから思案を悪じやといふた人は一人もござらぬ。これは何れもの心得やすきために、身共が初て、思案はみな悪じやといふて聞せませす事ござるワイ。思案がみな悪なわけ【理由】をいふてきかせませふ。ようきかツしやれイ。(「坐談隨筆」) P121

(23) 「迷がゆへに三界が城と成」といふわけ【事情・理由】は、…といふ事じや。(「坐談隨筆」) P124

(24) 然れども此訳【事情・理由】は本心を知らぬ人はわかちがたし。(「知心弁疑」) P136

(25) 其訳【事情・理由】はむかし或田舎の大家にて、…(「前訓」) P168

助動詞相当表現「わけだ」の成立

(26) 撰とは彼人は本心のとくがすぐれたの、彼人は学問がよいの、というわけ【理由】をもつてゑらぶにはあらず。(「会友大旨」) P192

(27) つひ思ふ其思ふたことの覚えぬわけ【理由】をいはゞ、こなたもこゝへ来と思ふて門を出るからこゝまで始終来々とおもふていさツしやれども、思ふたやらおもはぬやら覚えさツしやるまひ。(「朝倉新話」) P99

句を受けているものは、(22)「思案がみな悪なわけ」、(27)「つひ思ふ其思ふたことの覚えぬわけ」の二例であるが、述語として使われる助動詞的な「わけだ」ではなく、補語として使われており、実質名詞「事情」「理由」などに置き換えることができる。また、(23)は句に直接せず、「といふ」を介したものが、「…城と成といふわけ」…学問がよいのといふわけ」は、「…城と成わけ」「…学問がよいわけ」に転一步であり、句を受ける用例に近づいていると考えられる。

中沢道二(一七二五―一八〇三)「道二翁道話」(一七七五刊)

「道二翁道話」では連体修飾される「わけ」があまり使われていない。次のような例がわずかに使われているのみである。

(28) ソコデ人の腹の中も天、腹の外も同じ天なれど、腹の中の天は、性と名付けてある。是は少と様子のある事なれば、其わ

助動詞相当表現「わけだ」の成立

け【事情】は跡で知れる。P44

29 ソコデ彼の嫁がかやう〜と一部始終のわけを打明し、
… P69

(30) また此玉を鬼めが有難いの、尊いといふわけを知りて盗む
でもない。P188

布施松翁（一七二五〜一七八四）「松翁道話」（一八一三刊）

「松翁道話」は松翁没後三〇年近く経って刊行されたものである。分量は他と比べて決して少なくはないが、「松翁道話」には、述語としての用例はもとより、連体修飾をしている「わけ」も見あたらない。「いひわけ」を除けばわずかに「わつ」^{P34}・「かもない」^{P169}・「わけもないもの」^{P58}・「訳の違ったことぢや」^{P61}・「訳が知れぬ」^{P126}・P171、など単独で名詞として、或いは慣用表現として用いられたりするのみである。

細井平洲（一七二八〜一八〇二）「平洲先生諸民江教諭書取」（一七八三頃講）

心学道話に似た、教訓的な話である。分量は少ないにも拘わらず、用例は少なくない。主語として用いられるもの。

(31) 其訳【事情】は此頃当所に而取集たる、上への上納金五拾両
終盗つひとられたれば、… P36下

(32) 其不思議な訳【事情】と申のは、私江戸にて町々歩行く内に、

母様の御顔によふ似た女子の面が店に出てござりましたゆへに、… P36下

述語的に用いられるもの。

(33) …其書物にある事を、こふ言事は是道理、かふある事は此訳【理】と、書物の上で合点をして… P23上

(34) 心の有たけが顔に顯れて、我と我手にもあいその尽る有様なれば、鏡に移して見にくい体を見て、心のゆがみを直せといふ事のわけ【事情・理由】で、女の魂は鏡といふ事じや。P32上

(35) 娘は弥よ心元なく、「そふこそござるはしか、私江戸御主人の内うちで驚人たる事有て、何角なしに欠出て、今漸々着ましたが、夫はいか様成る訳【事情】でござります」P36上

用言を直接受けたものではなく、ほとんどが指示詞を受けたものであるが、述語に位置するものが多いのが注意される。

海保青陵（一七五五〜一八一七）「稽古談」（一八一三筆）

「稽古談」は講義録ではない。随って文末が「也」で終わっており、やや固い文体であるが、平易な文章である。分量が多いので用例も多い。次に句を受けているもののみを示す。

主語の例

(36) 江戸ニテハ、後藤庄三郎・後藤縫殿助ハトントノ貧ノ人也。

貧ニナリタルワケ【事情・理由】ハ、格式ヲ下サレタルコヘ

也。 P236下

(37) 此升小【人名】ト云モノ工夫ニテ、サシ米ト云コトヲ願ヒタルワケ【事情・理由】ハ、升平【人名】ハ仙台侯ノ銀主也。

補語の例

(38) 月並ノ講書ノ人不足セリトテ、江戸ヘ下ラネバナラヌワケ

【事情・状態】ニナリテ下レリ。 P345上

また、用言は受けないが、分裂文として述語になっているものもある。

(39) 凡閑官ハ貧ニテ、劇職ハ貧ナラヌハ此ワケ【事情・理由】也。

P291下

用例の中で著しいのは次に示したような用言を受ける「ワケ」「ガ」「アル」「ワケ」「ガ」「ナキ」という形である。全て「事情」「理由」などに置き換えられる。

(40) 路ニステ、アルモノヲヒロハヌハ、己レガトルベキワケ

【理・理由】ナキコヘ也。 P224上

(41) 初メノ談シ【話】ニテハ、役人ノ勝手ノ至極ヨキコトノ、銀主ノ勝手ノアシキコト也。是コノ通りデ出来ルワケ【道理】

ガナキ也。 P271上

(42) 兎ノ舜ニアタヘタルハ、アタフルワケ【理由】アリテアタヘ

タル也。 P282下

(43) 兎天下ヲ見ルニ、舜ガ天下第一ノ智アル人コヘニ、舜ニアタヘタリ。舜モ受ルワケ【理由】ガアル也。 P282下

(44) 【様々な証拠を挙げた後】コノアイダヘ陽虎ガ曰ガ入ルワケ

【道理】ナキ也。然レバコノ陽虎曰ハ、ドコニアルベキハツ

ジャトイヘバ、コレハ悪人ガ悪言ヲイフナラビニアルベキ也。

【孟子】の本文の錯簡についての言及 P296下

用言を受けない「わけがある」「わけもなし(き)」は以前にもしばしば見られたが、用言に直接する「ワケガアル(ナキ)也」という用例が多く現れたということは、句に直接する「わけ」が多用されてきたということであって、助動詞的な「わけだ」が萌す、或いは熟す前触れではないだろうか。

平田篤胤(一七七六―一八四三)「俗神道大意」(一八一―一講)、「古道大意」(一八一―三講)

くだけた口語を写したものの、やや分量が多いので、用例も多い。用言を受けたもののみを挙げる。 ③

(45) サテ始ニコノ仏ヲ、コノ御代ニ、御建立アソバシタル訣【事情】ヲ委ク記シテ、…(俗) P125下

(46) 扨コノ御被ト申テ配ルワケ【事情・理由】ハ、…(俗) P167下

- (47) 但シカヤウノ牽強付会ヲイタシテ、神ノ道神ノ教ト偽ツタノモ、実ハ不便ナワケ〔内容〕モアル。(「俗」) P209上
- (48) 神学者流ノ、神代ノ事実ヲトクニ、陰陽ヲ付会スルコトノ当ラ又訣〔理由〕ヲ、イッチ近イコトデ云ハウナラバ、：(「俗」) P213上
- (49) 初右ノ如ク、御国ノヌサ、ミテゲラヲ神ニ手向ケ、又人ニモ贈ル訣〔意味〕ガ、漢土ノ幣物ノ意ニ、能ク合ツテ居ル故ニ、其幣ノ字ヲ、御国ノヌサ、マタミテゲラト云フ語ヘ当タ物デヤ。(「俗」) P232上
- (50) 然ルニ大カタ世間ノ儒者ナドガ、儒書ノ上デモ斯ノ如ク、慥ナル訣〔事情・理由〕ノアルモ知ラス、只々ヒネクツタ理屈ノ教訓ヲ書テモルハ、：(「古」) P23
- 「事情」「理由」などの実質名詞で、用言を受ける「わけがアル」がここでも見られる。そして次の例は「わけがアル」のうちの句に直接する例である。そして「わけがアル」を「わけだ」に入れ替えても意味が通じる。
- (51) 但シはウチ皇産霊神ノ御名ノ義ヲバ、今ガ今キツト、心得ネバナラ又訣〔事情・理由〕ガ有二依テ、是ヲバ一通申マセウデゴザル。(「古」) P31
- (52) ……是ハ能当テアルト申スウチニ、七八分八当ツテ、二三分ハアタラ又訣〔理由〕ガアル。(「古」) P38
- (53) ……日本ニ於テハ、サウ柔弱ニハ決シテナラ又訣〔事情・理由〕ガアル。(「古」) P65
- (54) ……爰ガ風土ノセイデ、別シテ刀ハ、万国ニ勝レバナラ又訣〔事情・理由〕ガ有テ、：(「古」) P65
- また用言を受けて述語になる「わけだ」の用例もある。
- (55) 初カヤウニ、伝奏ノ申張ルヤウニ成テハ、重キコト故、モハヤ撰政殿下ト申セドモ、御一存デハナラヌワケ故、マツ思召ヲバ、御記シナサレツ、モ、五撰家ノコラスノオボシ召ヲ、御聞ナサル、コトデ、：(「俗」) P191上
- (56) 後御三代ノ御陵ヲスラ御祭アソバスニ、況テ御大祖ト坐ス大御神ノ御陵ヲ、御祭リナキコトハナイワケデヤ。(「俗」) P212下
- (57) ナント是デ真ノ道ト云フモノハ、教訓ノ書デハ其ウマミガ知レズ、事実ノ書物デナクテハ、真意ハ得ラレ又訣シヤト云フコトモ、合点ノユキサウナ物デゴザル。(「古」) P23
- (58) ……夫ニ外国ノ説ハ誤デ、我神代ノ説バカリガ、正シイノト云ハ、ドウカ我家ノ本尊ガ尊イト云タヤウデ、鼻屑ノサタガ過ルヤウダガ、ドウデゴザル。又サヤウニ紛ハシキ説ガ、此ニモカシコニモ有テハ、何レガ是トモ非トモ、定メ難イコト

トチャニ依テ、神代ノ事オツクルメテ、先ハ信ゼヌ方ガマシ
デアラウト難ジタテゴザル。ナントカヤウニ難ジラレテハ、
傍ヨリ見テハ、チト困ルデ有ウト思ハレマセウガ、一「向
コマル訣デハナイ。(古)」^{P41}

⁵⁹ 切右申ストホリ、此御国ハ、一通ノコトデハマキラヌ訣コ

エニ、天ニ於テ、色々ト御評議ガ有タテゴザル。^{P43}下

(古)

これらは句を受けて述語になっており、現代語の助動詞の「わけ
だ」と考えられるだろう。先の定義で「わけ」に対応する主語が消
去(主語の隠在を想定することもできない)され、上接する用言の
一部だと見なせるものが助動詞相当の「わけだ」だとしたが、それ
ぞれ「わけ」に対応する主語らしいものを想定しづらい。それより
も「ある」を述語として補って、「わけ」を主語として、「わけ
がある(ない)」と考えれば実質名詞「わけ」との連続が考えやす
くなる。また、次の「訣ノ物ジャ」というのはまだ助動詞として熟
さないが、⁽²⁾と同様過渡期的な表現と考えられる。

⁶⁰ 一人ト云モノハ、勞セス働カズニ居テハ、体ガ倦デ、

病ガ発ル訣ノ物ジャト云テ、其訣ガ委ク書テアルデ。

(古) ^{P67}

柴田鳩翁(一七八三—一八三九)「鳩翁道話」(一八三三講)「続

鳩翁道話」「続続鳩翁道話」「鳩翁道話拾遺」

分量は多いが、用言を受ける用例は少ない。用言を受けたもの
みを挙げる。

⁶¹ 「…われがかの男の問に答えぬ仔細「事情」はかくぞ」と申

されたとござります。(拾遺) ^{P295}

述語として使われたもの。助動詞相当と見なせる。

⁶² しょせんこの山寺に、いつまでいたとて国へ帰られるわけ

もなし、…(鳩翁道話) ^{P48}

⁶³ かほど大切な心法なれば、なかなか私どものような文盲な
ものが、申しつくされるわけではござりませぬ。(続々)

^{P179}

⁶⁴ ココで死なせては娘はさだめて心残り、第一婿殿にもすまぬ

わけ、どうでも一度は本復させねばと、医者殿に無理いうて
薬もあびるほどのませましたれどんと効験もあらわれず、

…(拾遺) ^{P307}

これら述語に使われる「わけだ」も「わけがある」に置き換えて
みると実質名詞として意味が通じる表現となる。

四 「わけ」の変遷

以上二七世紀末から一九世紀半ば辺りまでの用例をみた。一七世

紀末の「綱齋先生敬齋講義」や一八世紀初の「学談雑録」から一八世紀末の「道二翁道話」「松翁道話」辺りまでは用言を受ける用例が少なく、「わけを云ふ」のように単独の名詞で使われたり、或いは「わけもない」のような慣用表現で使われたり、用言を受けずに「わけがある」などと使われたり、「この」「そついふ」「どついふ」「…といふ」などを受けて述語以外に使われる用例が多く、用言或いは句を受ける用例は少なかったが、一九世紀の「稽古談」「古道大意」には用言・句を受ける例が多く、「俗神道大意」「古道大意」「鳩翁道話」などでは助動詞としての「わけだ」の用例も見られた。より中立的な口語であるはずの講義資料である「俗神道大意」「古道大意」に明らかな「わけだ」が多数見いだせたので、「わけだ」の使用は文化年間（一八〇四～一八一七）辺りには定着していたと考えられる。

「わけがある」という形は現代語の「～気がする」「～つもりがある」「～趣がある」などと同様に句による連体修飾を受けやすい形であり、そういう形が「稽古談」「古道大意」に多く見いだせるということは、それだけ「わけ」が単独で使われるだけではなく、句を受けて使われやすくなっていたと言えるだろう。

「わけ」の用法の拡大の順序は、次のように推測できる。

①「わけ」は主語として用いられ、前の文脈を受けて、「この

「かついふ」「その」「さついふ」「どの」「どついふ」などの指示詞による修飾がなされる用例が一般的で、その順序が分裂文として逆転し、述語に位置する場合もあった。

②そして用言或いは句を受けて主語となる「深いわけ」「なればならぬわけ」のような用例も見られ、とりわけ「句+わけがある/ない」のような存在を表す文が増えてきた。

③最後に「わけがある」に存在の意義が希薄になり「ある」は軽く添う補助動詞のような働きを担い、ついに「ある」が消去されて述語に用いられ、助動詞的な「わけだ」が成立した。一方で「句+わけがある+名詞」の「ある」が「の」に交替して「句+わけの名詞」という形になった過渡的な用例も見いだせた。

現代語の代表的な用例はA B Cの三つに分類でき、Aの因果関係を表す用法が最も頻用される典型的なものだと考えられるが、そこに至る道のりをみると、「～わけがある」という「事情」「理由」「道理」等の存在を表す表現が基礎にあった。そうするとBのように前文との関係の希薄な用法にも「～わけがある」という存在の意味が色濃く反映しているように思われる。現代語のようにAの因果関係で「わけ」を捉えるようになったのは助動詞的な用法が出現するまで見られなかったものである。

注

- ① 森重敏、『日本文法——主語と述語——』（武蔵野書院）一九六五¹⁶⁴、¹⁷⁸
- ② 松岡弘、「再説——のだ」の文、「わけだ」の文、『言語文化』30一九九三及び松岡弘「のだ」の文、「わけだ」の文に関する一考察、『言語文化』24一九八七
- ③ 拙稿「連体句「わけだ」——近世の用例を中心に——」、『同志社語彙研究』2二〇〇〇参照
- ④ 同右拙稿参照。「わけ」は中世以前には「区別」という意味を持ち、それが次第に「事情」「理由」の意味に変化していった。用例のページ数表記は岩波日本古典文学大系に依る。用例の検索には国文学研究資料館のデータベースを使わせていただいた。
- ⑤ 森岡健二、「口語史における心学道話の位置」、金田弘「漢籍国字解とその言語——江戸崎門学派の講義筆記を中心に」、『国語学』123一九八〇参照
- ⑥ 同右、「口語史における心学道話の位置」
- ⑦ 著者・講述者の出生年順に並べた。出典は次の通り
- ・「学談雑録」、『網斎先生敬齋感講義』、『雑話筆記』、『山崎闇齋学派』（日本思想大系³¹）一九八〇
 - ・「坐談隨筆」、『知心弁疑』、『前訓』、『会友大旨』、『石門心学』（日本思想大系⁴²）一九七二
 - ・「朝倉新話」、『手島堵庵心学集』（岩波文庫）一九三四
 - ・「道二翁道話」、『校訂道二翁道話』（岩波文庫）一九三五
 - ・「平洲先生諸民江教諭書取」、『近世後期儒家集』（日本思想大系⁴⁷）一九七二
 - ・「俗神道大意」、『古道大意』、『新修平田篤胤全集』8（平文社）一九七六

助動詞相当表現「わけだ」の成立

- ・「松翁道話」、『松翁道話』（岩波文庫）一九三六
 - ・「稽古談」、『本多利明 海保青陵』（日本思想大系¹¹）一九七〇
 - ・「鳩翁道話」、『続鳩翁道話』、『続続鳩翁道話』、『鳩翁道話拾遺』、『鳩翁道話』（東洋文庫¹⁵⁴）一九七〇
 - ・用例の掲出にあたって、旧字は原則として新字に改めた。
 - ・「俗神道大意」、『古道大意』では、「」は「コト」に、「△」は「コザル」に改めた。
 - ・用例が長すぎる場合は「…」で省略した。
 - ・「】」内は筆者の注である。
 - ・他は出典の表記に倣った。
- ⑧ 用言を受けた用例が多く、そのうち、似たような用例は一部割愛した。
- ⑨ 前掲松岡（一九八七）では、この二つの関係というのは、典型的には因果関係を表すことが多い¹⁷⁶とある。が、もちろん氏は因果関係で全てが説明できるとは考えていない。

本稿をなすにあたり、同志社大学留学生別科の平弥悠紀先生、光華女子大学の玉村禎郎先生、同志社大学の藤井俊博先生にご教示をいただいた。そして今年ご退職される玉村文郎先生の長年にわたるご指導に対し記して感謝の意を表す。